

研究課題:市中病院に所属するリハビリテーション職員に対する歯科への意識調査

～多施設共同研究～

研究者:尾崎 研一郎、小松本 悟、中村 智之、松川 勇

所属:足利赤十字病院

【背景と目的】

リハビリテーション患者の口腔内の問題が指摘されており、歯科のニーズが潜在していることが明らかになっている。今回、リハ職の口腔への関心や経験、歯科との連携に対する実態について多施設調査をしたので報告する。

【方法】

日本赤十字社の病院 90施設のリハ職1,511人に対してアンケートを実施した。アンケート内容として属性は、性別、年齢、役職、配属先、職種とした。経験の項目は、歯科との連携、口腔ケア、口腔の観察頻度、口腔の訴えを聞く、歯科領域に関する学習とした。心理的情報の項目は、リハ時における義歯や口腔衛生の必要性、歯科との連携の必要性についてリツカート尺度にて1点から5点でスコア化した。

【結果】

1,511人中、有効回答は1,468人(97%)であった。職種別では理学療法士 904人(62%)、作業療法士 366人(25%)、言語聴覚士 179人(12%)、医師 5人(0.4%)、その他 14人(1%)であった。歯科領域に関する学習の経験は447人(31%)に認められた。患者からの口腔に関する訴えは1,153人(79%)が経験していたが、そのうち歯科介入を確認したリハ職は272人(19%)に留まった。

2変量の解析について述べる。リハ時の義歯使用に意識の高いスタッフについて、性別は女性($P<0.001$)、年齢は30代が20代より有意に高く($P<0.001$)、30代が40代より有意に高かった($P=0.03$)。職種別では言語聴覚士が理学療法士($P<0.001$)、作業療法士($P=0.003$)より有意に高かった。リハ時の口腔衛生に対して意識の高いスタッフは、歯科領域の学習機会の経験有り($P<0.001$)、言語聴覚士が理学療法士、作業療法士より有意に高かった($P<0.01$)。歯科との連携に対して意識の高いスタッフは、女性($P=0.03$)、20代が40代より有意に高く($P=0.008$)、40代は50代より有意に高くなった($P=0.02$)。職種では言語聴覚士が理学療法士や作業療法士より有意に高く($P<0.001$)、また作業療法士が理学療法士より有意に高かった($P=0.02$)。

ロジスティック回帰分析では、「義歯」、「口腔衛生」、「歯科との連携」への意識の高さにおいて、全ての項目で「歯科領域への教育」に関して有意差を認めた(義歯 $P<0.05$ 、口腔衛生 $P<0.01$ 、歯科との連携 $P<0.001$)。

【結論】

約8割のリハ職が口腔の訴えを聴取しているにも関わらず、実際に歯科と連携できたのは約2割であった。また歯科領域についての学習の経験は約3割に留まった。つまりリハ科と歯科の連携は重要であると考えられ、リハ患者に対する歯科介入のシステム構築やリハ職員に対する歯科教育の必要性が示唆された。